

安井研二先生の「関わり合い、自分の考えをより 分かりやすく伝えられる生徒の育成」について

愛知教育大学 飯島康之

正しい答えを出すことは、昔から数学の大きな役割だったけれども、コンピュータなど、正しく問題を定式化できれば迅速に正しい答えを出してくれる道具が増えてきた今、状況から問題を定式化したり、言葉や式や表・グラフなどで表現したり、解釈したりすること、それらの役割が相対的に大きくなってきた。様々なところで、読解力との関わりやコミュニケーションとの関わりも論議されるようになってきた。数学の授業の中での言語活動に関しては、今後もいろいろな観点からの取り組みが必要なテーマの一つである。

本研究の冒頭で掲載されているアンケートを拝見すると、「数学で好きなことは何ですか？」の問いで「説明すること」は0%だが、これは四者択一という形式の影響もあるだろう。安井先生も指摘されているように、「一番できるようになりたいこと」として「考えること」と「説明すること」を合わせると過半数というところに、意欲を認めたいという点は同感である。

授業の中で活発に議論をしているような授業を拝見すると、まるで生徒の質が最初から違うように感じることもあるけれど、多くの場合、長期的な意図的指導が背景にあることが多い。発言したことはたとえ誤答であったとしても前向きに授業の中で生かしてくれるので次も発言しようと思えるようにするための授業の工夫など、臨機応変に対処することなども必要である。

今回の安井先生の発表の中では、音読計算によって「友達と声を出しやすくする」ための工夫や、解き方や考え方を説明する時間を意図的に工夫するなど、説明することへの抵抗を減らしたり、具体的なスキルを身につけることなどもねらっている。着実な試みだと思う。一方、「問題が変わってしまうと、数学を苦手としている生徒は説明をすることができなくなってしまう」ということだが、説明とは「正しい説明をする」ことだけではない。どこが難しそうか。先程の問題との違いはどこか。応用問題なら、大体どれくらいの答えになりそうか（見積もり）。誰かが板書した答えについてどう思うか。など、いろいろな点で語れる可能性はある。特に友達との関わり合いを重視したいとするならば、いわゆる「正しい説明」以外のことにも射程範囲を広げていくことが必要になると思う。今後の展開を楽しみにしたい。